

49 『香川修庵医談』に残る後藤良山『病因考』の研究

星野 卓之, 小田口 浩, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

【緒言】『病因考』は後藤良山(1659-1733)が「初年のとき医を知らんと欲する人のために説きたること」を門人が集録したもので、写本が多数残されている。香川修庵(1683-1755)原著、良山の孫である後藤敏(慕庵, 1736-1788)校正による『校正病因考』は宝暦7年(1757)に成ったが、良山晩年の定論と異なることから世に出ず、文化12年(1815)になって良山の曾孫である徯(洵美)がその経緯を付言に記し、ようやく出版された。『病因考』の異本は刊本と同じ篇次ものがほとんどで、香川修庵による校訂過程を窺わせる資料は少ない。

【方法】『病因考』とは構成が異なるがほぼ同内容を含む、内藤記念くすり博物館所蔵の『香川修庵医談』二巻(大同薬室文庫36713, 以下『医談』と略す)と刊本の『校正病因考』を比較した。

【結果】『医談』巻之一の篇次は、中気、中寒、中暑、中湿、咳嗽、喘急、瘧・痢、泄瀉、嘔吐噦、噎膈反胃、鼓脹、水腫、黄疸、火動、勞瘵、吞酸・嘈雜・噯氣、眩暈、頭痛、心痛、腹痛、腰痛・脇痛・背痛、臂痛、痛風、脚氣、疝、瘵、痿・痺、消渴、癲癩狂、怔忡・驚悸、健忘、不寐、遺精・遺尿・白濁・淋症・大小便閉、痔漏・脱肛、耳病、鼻病、傷食のように刊本とは異なっており、末尾に1714年にあたる「右正徳甲午十二月録」「師説筆記巻之一終」という記載があった。第二巻冒頭は「師説筆記巻之三」、副題で「病因考」となっており、眼目、諸血、自汗・盜汗、口舌、牙齒、咽喉腫・喉痺、諸瘡、便毒、癩風・癘風、折傷、癰疽・肺癰・腎癰、疔、痘、婦人、経閉・崩漏・帶下、妊娠諸疾、産、乳岩の篇が続き、最後に1715年にあたる「正徳乙未十月録」、翌年の「丙同申三月校訂 洛陽隱者香川修庵述」、さらに「右此一巻者、後藤所述伝倣而門人之外無化不免見談 今予処為知己堅以神文付属之者也 宝暦四甲戌年仲秋写」という1754年の写本である付記がなされていた。『校正病因考』で巻末にある黒丸子などの9つの処方、『医談』には記載されていなかった。

【考察】『医談』の集録された1714-15年は、香川修庵は31-32歳であり、良山門下から独立して数年の時期と目される。『医談』は『病因考』の類本中でも古いものと考えられ、『校正病因考』とは若干異なる記載があり、相互参照することで理解が深まるという点で貴重な資料と言える。書名を『師説筆記』とする『病因考』の異本は、旧土佐山内家宝物史料館蔵の写本など複数あるが、内容は刊本とほぼ一致し、今回取り上げた『医談』の構成は珍しい。『医談』の篇名に用いられた病証とその順序は、本文中に引用される『医学正伝』に倣ったと考えられる。そして当初の書名は『師説筆記』とされ、その後現在『国書総目録』に収載される別の『師説筆記』(別称『良山先生家説筆記』)と区別するために『病因考』という書名になったのであろう。『校正病因考』付言には「以傷寒而為中風傷寒、以噎而為噎膈、鼓脹而贅蠱脹、以哮而為喘急、以痺而為中風偏枯、以虚勞而為虚損火動及勞瘵、以悸而為怔忡驚悸之類、而為古人之説而非晚年正名之語也」と問題点が挙げられている。良山が晩年正した症候名とされる「噎」「痺」「悸」は、初心者向けに『医学正伝』を参照した『病因考』では採用されず、『一本堂行余医言』で篇名として掲げられ論じられた。『行余医言』の成立過程を残す写本や、類書(研医会図書館所蔵『良山先生行余医言』など)に認められるように、良山晩年の医論は、良山門下が跡をついだ香川一本堂でまとめられて出版に至り、広く流布することとなった。

【結論】『病因考』の成立過程と後藤・香川一門の医論の変遷が一部明らかとなった。